

かごの中のカナリヤから青い鳥へ

資料：釜ヶ崎資料センター提供

釜ヶ崎はこれまで、社会環境の状態を見るための指標の一つ、あるいは社会構造のほころびについて警鐘を鳴らす根拠の一つとして、炭鉱坑内に持ち込まれた籠の中のカナリヤであるかの如き視線にさらされてきた。

カナリヤ自身の意思や自由に飛び回る希望は問われることなく、見る側の利用価値に重点があったといえる。

なるほど釜ヶ崎は、近代社会が必然的に排出する都市パリア（賤民）の集積地としての機能を担わされてきた地域であり、歴史的経緯を基盤とする地域・人的関係、社会諸関係から排除された人々が集まる地として、他地域よりも人工的に生成された側面が強く、排除の結果から排除過程を検討し、安定した社会を目指すための修正点を見出すには便利な観察地であったであろう。

しかし、排除された人々、釜ヶ崎地域住民の都市パリアとしての存在そのものは、排除過程の個人への影響を無視したまま、多数社会への適応が強制ないし推奨・指導され、短期的に適応し得ないものは、そのまま放置された。

働き方を中心とした社会的排除の連鎖が強まって、「格差・貧困社会」となった現在、排除された人々が存在形態において範囲を拡大、数量的に多出し、都市パリアとしてのレッテルづけが困難な状況にあり、無数の点在するカナリヤの出現がカナリヤとしての釜ヶ崎の「価値」を減少せしめた。

それでも釜ヶ崎は存在する。

観察地・カナリヤとしての価値を減じた釜ヶ崎は、それそのものとして問い直される機会をようやく得たといえる。社会的排除の集積地として抱える課題が、それを体現する諸個人を通して解決されるために必要な、個人の上にある排除結果・影響が克服されるために必要な取り組みが、釜ヶ崎を自分の意思で自由に飛び回る青い鳥へと変身させる。

釜ヶ崎（あいりん地区）とは

西成区太子 1 丁目に「大阪市立更生相談所」があります。大阪市立更生相談所条例（参考1）にもとづく、「あいりん住民の福祉の向上を図るため、労働者を対象とした各種の相談・保護事業と、環境改善の事業を行う機関」だそうです（平成 8 年版事業概要）。

事業概要には「あいりん地区周辺要図」が



掲載されていますが、前ページの地図に見られる地域囲み線は後で書き込んだもので、掲載されている原図にはありません。

事業概要に掲載されている地図では、おおよその範囲というのは判断できますが、統計数字を見る場合などでは不便です。



左の図表は、大阪市のホームページ

(http://www.city.osaka.jp/kei_eikikakushitsu/kaikaku/kaike_n/shiryo/bunseki/pdf/070511/airin_taisaku_01.pdf) で公開されている『2007年5月「ホームレス対策・あいらん対策—事業分析報告』から転載したものです。国勢調査を参考にし

たとされています。

	総計	男性	女性
地区人口合計	25,241	21,512	3,729
萩之茶屋1	6,710	6,208	502
萩之茶屋2	5,598	5,401	197
萩之茶屋3	2,177	1,864	313
山王1	2,017	1,134	883
山王2	1,819	1,124	695
太子1	3,798	3,396	402
太子2	637	513	124
花園北1	1,920	1,483	437
天下茶屋北1	565	389	176
町丁別計	25,241	21,512	3,729

2005年国勢調査町丁別集計と照らし合わせると、「萩之茶屋1～3丁目、山王1・2丁目、太子1・2丁目、花園北1丁目、天下茶屋北1丁目」の合計であることがわかります。

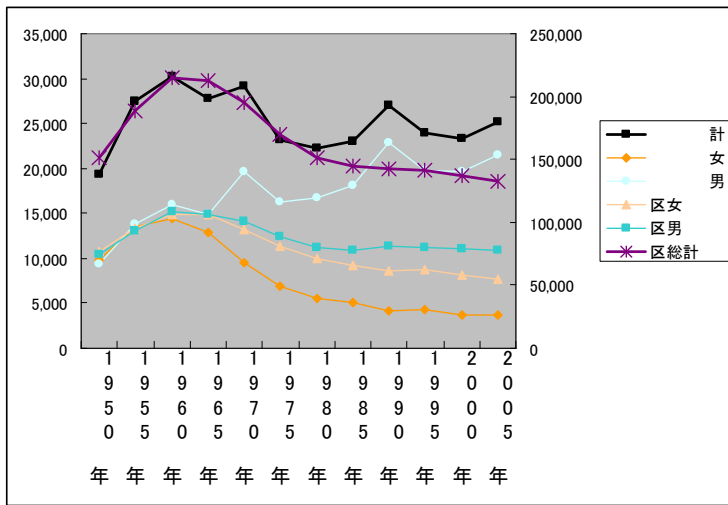
この地図上の範囲は、先に掲げた地図の枠囲い範囲内と合致しています。

今後、この文章中で「あいらん地区」という場合は、ここに掲げられている範囲を指すことにします。

当該地域では、1973年に町名変更がなされています。左の表が、新旧町名の対照表です。海道町や今池町は二分されています(参考:旧町名地図をご覧ください)。

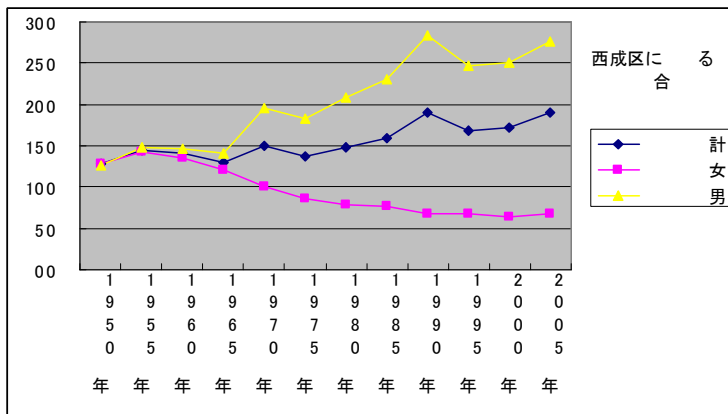
新町名(1973年)	新町名に含まれる旧町名		
萩之茶屋1丁目	東入船町	西入船町	
萩之茶屋2丁目	甲岸町	海道町*	
萩之茶屋3丁目	東萩町	海道町*	
太子1丁目	東田町		
太子2丁目	今池町*		
山王1丁目	山王町1丁目	山王町2丁目	
山王2丁目	山王町3丁目		
花園北1丁目	東四条町1丁目	東四条町2丁目	東四条町3丁目
天下茶屋北1丁目	今池町*		



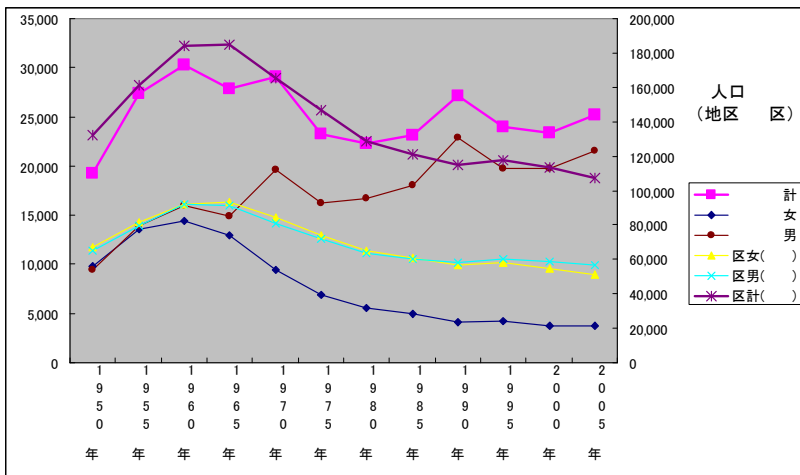


国勢調査の結果により、地区人口と西成区の推移（男女別・合計）をグラフにすると左のようになります（元数字は、参考：国勢調査に見る人口構成—男女・区対比—をご覧ください）。

区人口、地区人口共に1960年までは増加していますが、区人口は1965年以降減少に転じているにもかかわらず、地区人口は増減を繰り返しています。



女性人口は、区・地区とも1965年以降減少していますが、減少率は地区の方がはるかに大きくなっています。男性人口は、地区人口については増減幅が大きく、2001年—2005年では増加傾向となっています。

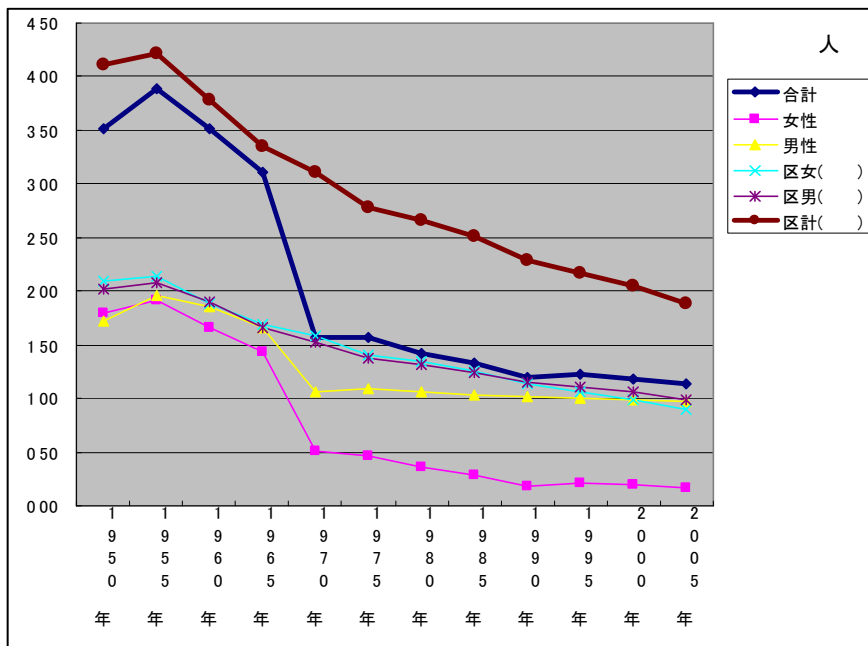


区男性人口は1965年以降減少傾向なのですが、1990年以降やや持ち直します。

人口推移の下のグラフは、区に占める地区の割合を示したのですが、地区男性人口が区男性人口に占める割合は、1990年が高くなっており、区男性人口

への影響が大きくなっていることを示しています。2005年では区男性人口の27.6%が地区に住んでいるという結果となっています。

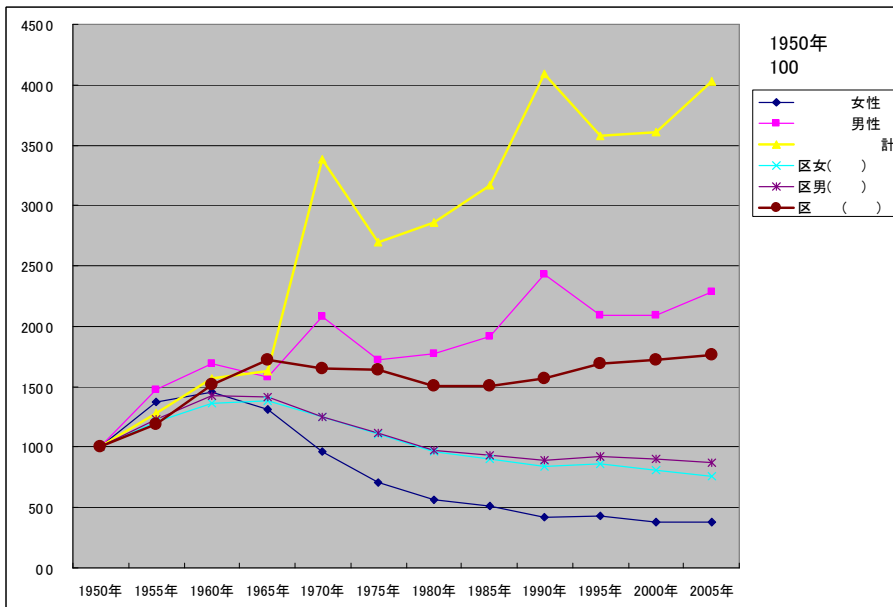
西成区の計からあいりん地区の数字を引いたものとあいりん地区計で作図したのが下段のグラフです。あいりん地区の直接の影響を除いた区の男女の差は、上段のグラフよりは小さく見えます。



世帯あたり人員は、あいりん地区、あいりん地区を除く西成区共に1955年が最大であり、以降減少を続けます。しかし、減少幅の様相が違い、地区では1970年に大きく落ち込み、極端な単身化が進んだことを示しています。特に、女性

の減少が著しく、1世帯当たり一人もいない状況となっています。あいりん地区を除く区では、核家族化の進行はありながら、世帯当たり男女比はほぼ半々の状態で推移しています。

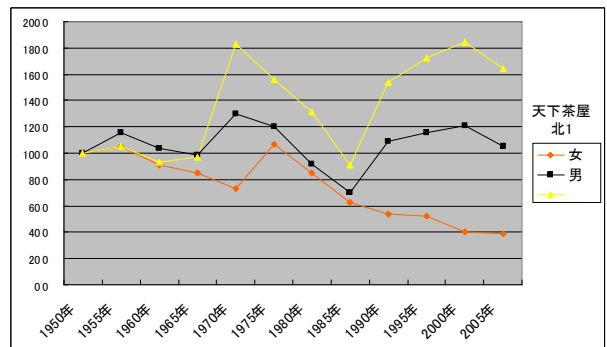
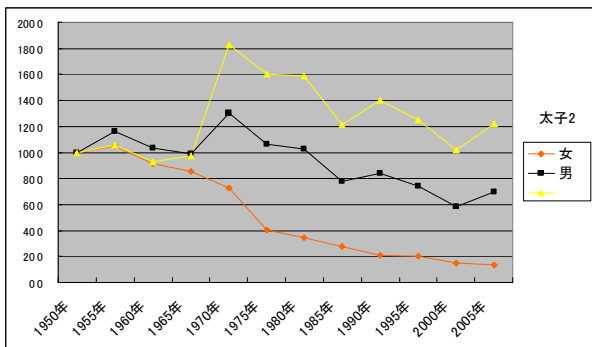
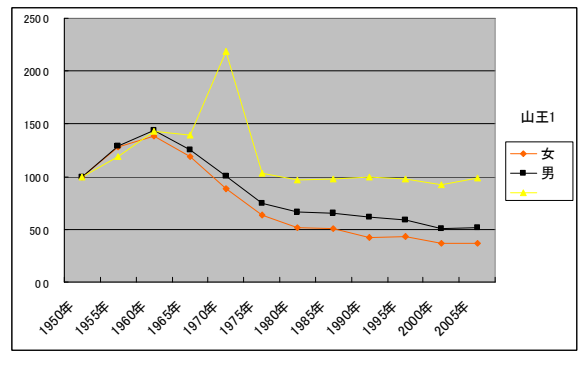
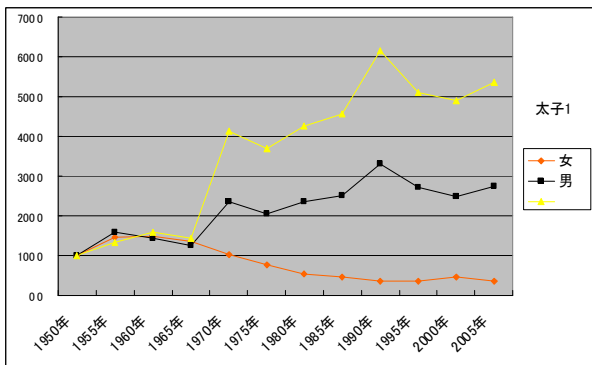
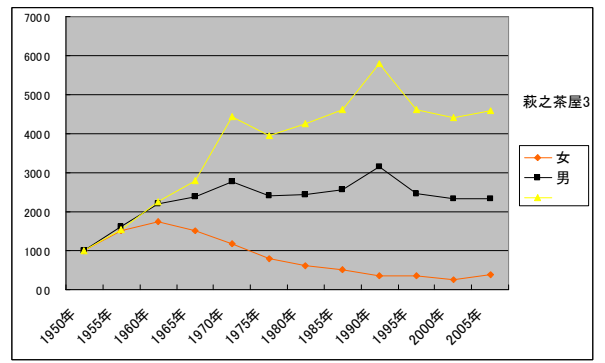
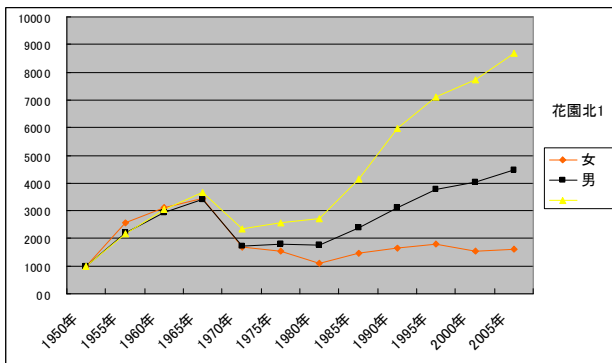
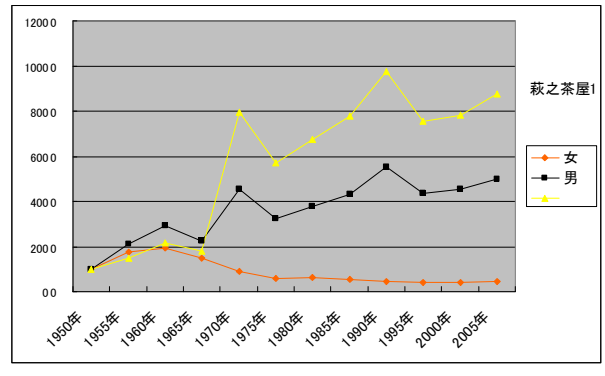
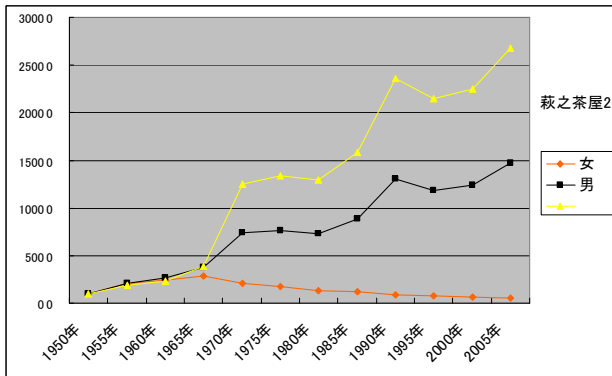
あいりん地区を除く区でも、2005年には1世帯当たり2人を割り込んでいます。あいりん地区と共に、男女別々に世帯あたり人員を見ると1人いない(それぞれ0.9人)ということになっており、男性あるいは女性の一人世帯が増えていることを示しています。あいりん地区は、ほぼ男性の単身世帯だけといてもいい状態です。



1950年を100として、人口、世帯数の増減変化のグラフを作成してみました。

西成区(あいりん地区除く)は、男女人口共に1980年以降1950年の数字を下回っています。一貫して1950年の数字

を上回っているのは、世帯数、あいりん男の数字であることがわかります。



一口にあいりん地区といっても、町丁別に男・女・世帯の数字の推移を見るといくつかのパターンと膨張の大きさに違いがあることがわかります。萩之茶屋 2 丁目の変化が最も大きく、男性人口についていえば、1995 年の落ち込みを除いて拡大し続けています。萩之茶屋 2 丁目は、地区全体の乱高下を規定する特色を示しています。



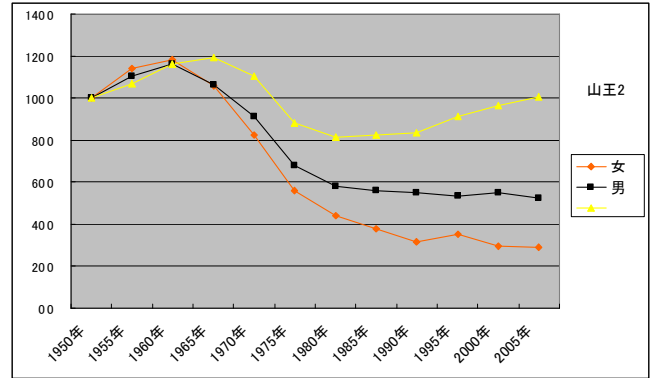
1942年 白線は戦災復興土地地区画整理事業の萩之茶屋工区界
『甞えるわが街—戦災復興土地地区画整理事業(西成地区)』
大阪市建設局,1990年所収



1948年
米軍撮影空中写真「R500-70」より

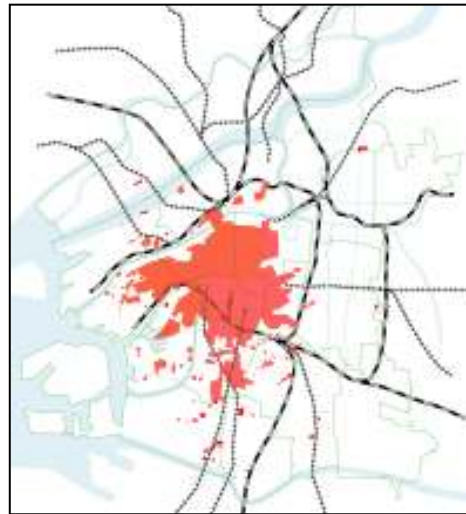


1953年
国際新聞社
『航空写真地図大観「大阪編」』1953年より(市図蔵)



地区人

	1950年	1970年	1990年	2005年
萩之茶屋1	2,339	6,629	7,375	6,710
萩之茶屋2	712	3,444	5,099	5,598
萩之茶屋3	1,631	3,210	2,825	2,177
山王1	4,606	4,322	2,388	2,017
山王2	4,560	3,954	1,944	1,819
太子1	2,382	4,116	4,516	3,798
太子2	1,643	1,615	806	637
花園北1	602	1,026	1,483	1,920
天下茶屋北1	821	808	644	565



1945年3月31日第1回大阪空襲

<http://www.geocities.jp/jouhoku21/heiwa/o-kuusyuu1.html>

地区内各町の現在に至る変化に影響を与えた要因の一つに、1945年3月31日第1回大阪空襲があげられます。

左写真と上の国勢調査数字を見ると、焼け残った地域の人口の停滞・縮小傾向は明らかです。闇市として一時期栄えた

今池周辺（太子2丁目・天下茶屋北1）は、人口が減少し、人口の増が遅かった萩之茶屋2丁目（とりわけ旧甲岸）は、簡宿そして現在の転用マンションによって人口の増加を実現しています。

地	地別			る合			総計
			総計			総計	
萩之茶屋1	35	21	56	315	292	306	375
萩之茶屋2	31	24	55	279	333	301	436
萩之茶屋3	6	9	15	54	125	82	600
太子1	31	12	43	279	167	235	279
太子2	1	2	3	09	28	16	667
山王1	1		1	09	00	05	00
山王2	1	1	2	09	14	11	500
山王3		1	1	00	14	05	1000
花園北1		1	1	00	14	05	1000
花園北2	1		1	09	00	05	00
天下茶屋東1	1		1	09	00	05	00
天下茶屋北1	1		1	09	00	05	00
天下茶屋北2	2	1	3	18	14	16	333
総計	111	72	183	1000	1000	1000	393

現在営業している簡宿（平成19年度末）と転業マンション（平成20年8月現在）の施設数地域内分布は、萩之茶屋1・2丁目、太子1丁目

で84.2%を占めています。これらの地域は、空襲により焼けた地域です。

調 (368)

町名別			計	
ケ 地 区	東田	36	4	40
	山王13	20	1	21
	東入船	34	21	55
	西入船	13	3	16
	海道	6	8	14
	甲岸	12	4	16
	今池	3	1	4
		3	2	5
	東四条	2	2	4
	東萩	1	4	5
計	130	50	180	
地 区	町2	3	5	8
	計	3	45	48
合計	133	95	228	

「簡易宿所調(昭和36年8月現在)」は「釜ヶ崎の実態 大阪府警察本部防犯部」に掲載されているものですが、宿泊人数は「現在釜ヶ崎地区には次表のとおり、180軒(許可130軒、無許可50軒)の「ドヤ」があり、これに居住ないしは一時滞在する者の数はおおむね12,000~13,000名ぐらいと推定される。」とされています。

(参考資料:釜ヶ崎の実態 大阪府警察本部防犯部 昭和36年9月-参照してください)

1960年国勢調査では地区人口30,306人(男15,943人、女14,363人)でした。女性の利用者は5分の一と推定されていますから10,000人(12,500÷5×4)がドヤ利用男性と計算されます。この推定値は、国勢調査男性の62.7%にあたります。バラック・一般世帯の男性人員が把握されれば、国

勢調査の把握率もある程度計算できるのですが、手持ちの資料ではできません。

「s46」「s47」は、「あいりん地区の実態」各年版に掲載されていた表です。

簡易宿泊所の収容能力が1万人も増加していることが示されています。

区					合計	
()	145	14,929	61	6,539	206	21,468
	1	230	*	*	1	230
	8	941	1	50	9	991
屋	4	207	*	*	4	207
計	158	16,307	62	6,589	220	22,896

区					合計	
()	148	18,157	56	3,188	204	21,345
	1	230			1	230
	3	436	3	276	6	712
屋	3	197			3	197
計	155	19,020	59	3,464	214	22,484

									合計
46年		220	2	46	286			25	579
		22,896	330	2,852	10,582				36,660
47年		214	3	56	278			25	576
		22,484	330	4,200	20,850				47,864

簡易宿泊所以外の宿泊施設を含めた数字は、上記表ですが、収容能力が急増加している様子が伺えます。ただし、集計範囲が本稿で指すあいりん地区よりも広いと思われ、幾らか差し引いて見る必要があります。

1970年の地区人口29,124人（男19,665人、女9,464人）でした。仮に、西萩町（花園北2に相当）人口1,606人（男732人、女874人）を足すと、人口30,730人（男20,397

町名別 別	地区内に 調査											56年12	
	花園北 1丁目	花園北 2丁目	萩之茶屋 1丁目	萩之茶屋 2丁目	萩之茶屋 3丁目	太子 1丁目	太子 2丁目	山王 1丁目	山王 2丁目	山王 3丁目	天下茶屋北 1丁目	合計	人 下 55年
	(2	2	(60	(39	(19	(39	(4	(3	(2			(168	17,674
	3	7	(2	(5	(8	2	2	3	5			(15	2,310
	(3	9	(4	29	36	21	46	16	58	38	1	(9	3,942
							6	3	12	8		1	30
計	(8	18	(66	(41	(28	(39	(4	(3	(3			(192	24,463
							6	3	12	8		1	30
							22	2	5	3		1	87
	(1		(21	(16	(8	(15	(2	(2				(65	0
	1		34	24	13	24	2	3	1			102	0
平屋												0	0
												0	0
2.3												23	1
												242	0
	(5		(3	(1	(1							(9	0
	7		1	3	8							20	0
			(1	(1	(1			(1	(1			(5	0
	4	2	6	7	4	2		2	1			28	0
計	(6	18	(22	(19	(10	(16	(2	(3	(1			(19	0
												532	

() 20 調査 下 () 内 5

人) となり
ます。

18,300人
（簡易宿泊
所収容能力
の8割）÷
（地区男性
人口19,665

人＋西萩町
男732人）

= 52.9%。

これにより、
地区男性の

52.9%は簡
易宿泊所の

利用者と推
定すること

ができると思
われます。

ちなみに宿
泊施設収容

能力に占め
る簡宿の割

合は62.5%。
その8割(利

用率)は、

								合計
57年		189	43	270	32			534
		17,674	2,310	3,942	537			24,463
58年		181	45	270	30			526
		15,089	2,466	3,942	537			22,034
59年		180	42	246	27		15	510
		14,508	2,798	6,278	477		388	24,449
60年		177	42	244	27		15	505
		14,540	2,825	6,233	477		808	24,883

調

50年	196	11,059人	1,602人	女子	757人	計13,418	669
	20,046						
55年	188	11,815人	1,509人	女子	480人	計13,804	748
	18,431						
58年	183	11,254人	1,060人	女子	387人	計12,707	834
	15,213						

50%です。この計算の難点は、持ち家が考慮されていないことですが、この地域では、とりあえず無視しても大きな影響はない数字だと考えることにします。

「別表第1 その1」は、「あいりん地区の実態 ☆昭和56年の防犯活動概況を中心として 大阪府警察本部防犯部 /西成警察署 昭和57年3月」に掲載されていたものです。

その下の表は、「あいりん地区の実態—あいりん白書」各年版から作成。

	35年	40年	45年	50年	55年	60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
	1960年	1965年	1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年
合計	30,306	27,818	29,124	23,217	22,233	23,083	27,080	23,978	23,401	25,241
女性	14,363	12,906	9,464	6,956	5,554	5,022	4,167	4,225	3,720	3,729
男性	15,943	14,912	19,665	16,261	16,679	18,061	22,913	19,753	19,681	21,512
計	8,623	8,948	18,608	14,824	15,731	17,434	22,504	19,648	19,864	22,130
	180		220	196	168					111
	12,500		22,896	20,046	17,674					
				196	188					
平				13,418	13,804					
			46		43					
			2,852		2,310					
				6,055	5,674		5,249	5,729	6,272	11,650
人					12,018			9,315	9,049	14,061
1					2.12			1.63	1.44	1.21
				8,769	10,057		17,255	13,919	13,592	10,480
人					10,218			14,663	14,352	11,180
1					1.02			1.05	1.06	1.07
				40.8	36.1		23.3	29.2	31.6	52.6
				59.2	63.9		76.7	70.8	68.4	47.4

前掲資料を整理し、国勢調査の世帯分類を付け加えたのが上の表です。

もっとも資料数字の多い1980(昭和55)年で国勢調査と実態との差を推測してみることになります。普通世帯は5,674世帯で、1世帯当たり人員が2.12ですから、ほぼ男女同数と見なしても大きな間違いではないと思われます。

よって、普通世帯人員の約半数6,000人を男性とします(女性は6,018人)。地区男性合計16,679人から、一般世帯の推定男性数6,000人を引くと10,679人となります。

その他世帯人員10,218人全てを男性としても461人多い数字ですが、ほぼ妥当な計算と見なしておきます。

1980年12月某日の簡宿の利用者は13,804人とされています。ごく僅か女性、こどもも含まれていますが、そして、調査地域がここで取り扱うあいりん地区よりやや広いと言うこともあります。とりあえず、地区内男性の実数に近いとすると、国勢調査把握から推定されたその他世帯男性人員より3,500人は多いことになります。

このことから、1980年国勢調査把握は、男性人員において3,500人は過小ではなかろうかという推測が成り立ちます。

各国勢調査において、男性人員は2割増した数字が実態に近い、乱暴に拡大して言えば、そういうこともいえます。

ただ近年はそれが当てはまらないのではないかという傾向を示しています。あいりん地区の世帯分類では、一貫して、一般世帯よりその他世帯の方が多かったと思われませんが、1995年、2000年では、人員でもその他世帯の方が多くなっています。

しかし、2005年にいたって、世帯数、世帯人員とも一般世帯の占める割合がその他世帯

を上回っています。この傾向は、2005年以降も強まっているものと考えられます。このことは、国勢調査の把握率の向上に結びつくものであると考えら、男性人員の実数を計算するために国勢調査把握男性人員にかける割増率が、1980年のように2割でいいかどうかは、現在の手持ち資料では判断できません。

1990年		に る 合
に	5,249	
	5,193	231
	1,154	51
	250	11
	3,686	164
	103	05
	56	02
に	0	

一般世帯の建て方別分類によれば、地区内の持ち家に住む世帯割合は低く（1990年で全世帯の5.1%）民営の借家、あるいは簡易宿泊所に住む世帯が多いことを示しています。

2000年と2005年を比較すると、共同住宅に住む世帯が4,852世帯から10,357世帯へと急増していることがわかります。

共同住宅の階層別内訳では、2000年から11階建て以上が追加されていますし、6階建て以上に住む世帯は2000年の2,413世帯から、2005年の6,658世帯へと、4,245世帯も増えています。

あいりん地区において、あたかもマンション建設ブームがあったかの如き数字ですが、7頁に示した現在営業中の簡宿・転業マンションの表でも明らかのように、簡宿から転業し、共同住宅へとなったことから、その建物内の居住者がその他世帯でなく、一般世帯と把握されることとなったに

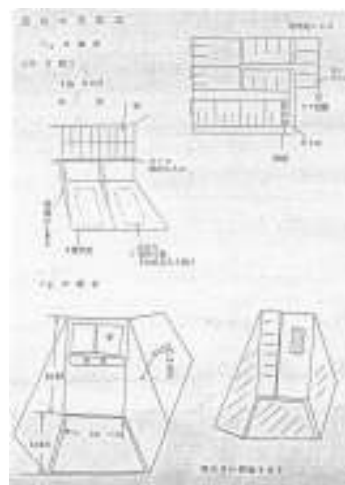
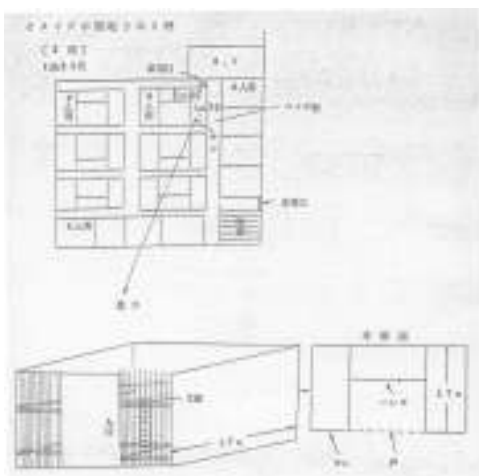
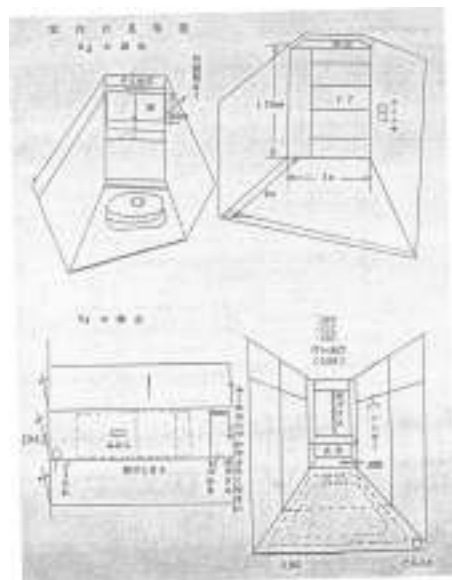
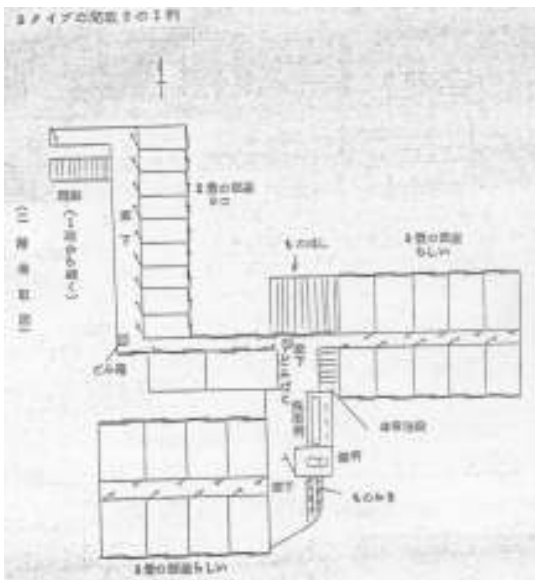
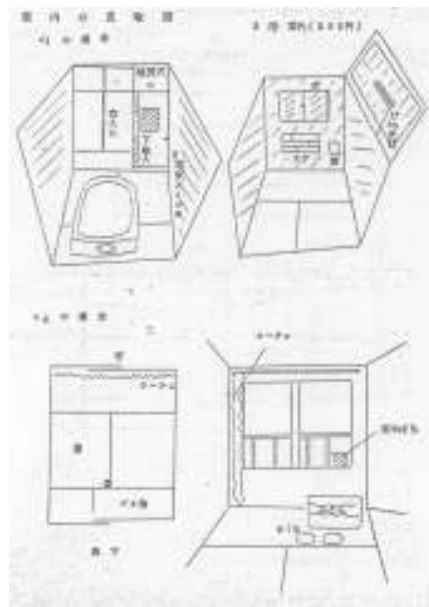
	1995年	2000年	2005年
総 ()	5,729	6,272	11,650
	605	611	634
屋	947	771	648
	4,149	4,852	10,357
1 2	1,339	1,290	1,148
3 5	1,246	1,149	2,551
6	1,564	1,727	5,841
11		686	817
	28	38	11
総 ()	1000	1000	1000
	106	97	54
屋	165	123	56
	724	774	889
1 2	234	206	99
3 5	217	183	219
6	273	275	501
11	00	109	70
	05	06	01

すぎません。



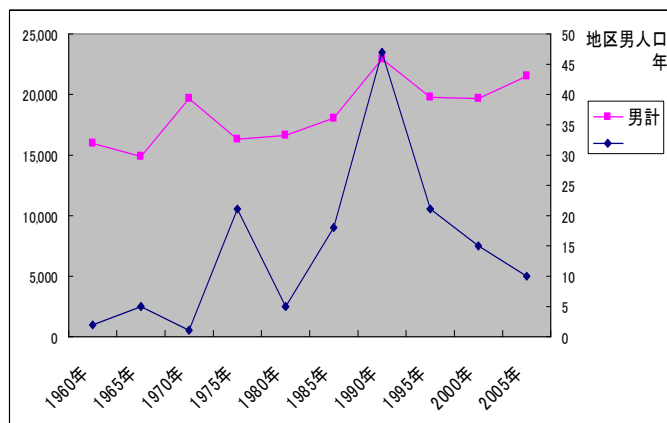
焼け跡から人口密集の地へとあいりん地区がなり得たのは、狭い面積に人を収容するドヤ・簡易宿所の役割が大きいといえます。

建物は高層化し、多少の改善は見られますが、三畳一間が基本であることは変わりません。



地				総計	
萩之茶屋1		35	22	3	60
	屋	29	22	2	53
	総屋	3,207	2,415	519	6,141
	平屋	1106	1098	2595	1159
萩之茶屋2		30	24	4	58
	屋	20	24	3	47
	総屋	1,815	2,447	221	4,483
	平屋	908	1020	737	954
萩之茶屋3		6	9	2	17
	屋	6	9		15
	総屋	546	554		1,100
	平屋	91	616		733
太子1		31	12	3	46
	屋	25	12		37
	総屋	2,028	904		2,932
	平屋	811	753		792
太子2		1	3	1	5
	屋	1	2	1	4
	総屋	52	278	66	396
	平屋	52	139	66	99
山王1		1		1	2
	屋	1			1
	総屋	30			30
	平屋	30			30
山王2		1	1		2
	屋	1	1		2
	総屋	7	49		56
	平屋	7	49		28
山王3			1		1
	屋		1		1
	総屋		37		37
	平屋		37		37
花園北1			1		1
	屋		1		1
	総屋		130		130
	平屋		130		130
花園北2		1			1
	屋	1			1
	総屋	45			45
	平屋	45			45
天下茶屋東1		1			1
	屋	1			1
	総屋	10			10
	平屋	10			10
天下茶屋北1		1			1
	屋	1			1
	総屋	210			210
	平屋	210			210
天下茶屋北2		2	1	1	4
	屋	2	1		3
	総屋	81	147		228
	平屋	405	147		76
総計		110	74	15	199
	屋	88	73	6	167
	総屋	8,031	6,961	806	15,798
	平屋	913	954	1343	946

年				総計		
1955	60	1		1	2	14
1961	65	3		2	5	34
1966	69		1		1	07
1970	74	15	1	5	21	145
1975	79	5			5	34
1980	84	16	1	1	18	124
1985	89	33	12	2	47	324
1990	94	18	2	1	21	145
1995	99	9	4	2	15	103
2000	05	10			10	69
総計		110	21	14	145	1000
			53	1	54	



現在営業許可を受けている簡易宿泊所（110軒）とアパート・マンションへと転業した元簡宿（74軒）、そして最近5年間に廃業した簡宿（15軒）、合計199軒について、屋号・住所等を把握していますが、その中で、部屋数の分かっているものは167軒、許可年代が判っているのは145軒です。

それによると、簡宿・転業の部屋数合計は14,991部屋です。これに不明分と転業ではなく建替え分を見込みで足すと、約

18,000部屋になると思われます。

営業許可の軒数の山は、1970～74年と1985～89年に見られます。それ以前の山は、記録が残っていないので確認することができません。1965年から74年にかけて、簡宿の近代化・建替えがあったと考えられます。

1970年3月の「大阪市立今池生活館・愛隣寮退居世帯追跡調査」報告書の「愛隣地区の今」の項には、「最近では万国博覧会建設ブームの好景気の余波を受けて、労務者の懐も年々

豊かになり、これを吸収しようとはかる老朽木賃宿が「××ホテル」などと、現代的な名称と体裁で競合的な勢いで改築をはじめ、街の表通りだけを見ると、いかにも愛隣地区全体が新しい労務者の街へ急速に脱皮しようとしているかのような錯覚にとらわれる。」と記しています。

当時の地区内各町の様子についても、以下のように書き留めています。

- 東萩・海道—多人数世帯用の老朽木造簡易宿泊所が密集している。
- 東入船・西入船—単身労務者用の中層簡易宿泊所が多い。
- 山王・今池—東部は非戦災地区でアパート借間が多い。
- 東田—木造のドヤを改造した、単身労務者用高層大衆ホテルが櫛比。
- バラック建ての古い家屋が目立つ。一部不法占拠の家屋もある。

1985～89年の山は、関空工事（1987年埋め立て工事開始、1992年躯体工事開始、1994年開港）による70年万博準備工事期並の活況を当て込んでの改装・建替えがあったものと考えられます。

1986年5月25日読売新聞夕刊（大阪版）に、「愛隣地区“高級化”、宿泊所改築ブーム、新空港あてこむ」の見出しがついた記事があります。

『労働者の町、大阪市西成区のあいりん地区の簡易宿泊所が高級化し、地区全体が様変わりをはじめている。今秋にも本格着工する関西新空港を当て込んで、業者が次々と鉄筋、高層化に乗り出したため、今年すでに一軒がオープンし、九件が改装中。

“あいりん白書”によると、現在地区内にある宿泊所は177軒。内鉄筋は110軒（62%）で、57年の99軒に比べ11軒増えた。

一方、50年以後ずっと1万7千人前後だった地区内の労働者人口は、西成署の調べによると昨年12月、1万8千人を超えた。』

ちなみに、国勢調査では、1975年男16,261人 1980年男16,679人 1985年18,061人でした。16,000人の2割り増しは19,200人、そこから一般世帯の男性推定6,000人を引くと13,200人、西成署推定の地区労働者人口17,000人との差は3,800人。多分、西成署推定の地区労働者人口には、アパート住まいの、つまり一般世帯に含まれている日雇い労働者も考慮に入れているでしょうから、一般世帯の男性推定6,000人の内どのくらいを日雇い労働者と見積もるかによって差は変動します。

1991年8月13日朝日新聞（大阪版）は、「あいりん白書30年特集号」をもとに、「地区内の労働者はいま、推定約2万1千人。87年下半年頃頃から好況が続き、毎年千人ずつ増えている。かつては木造だった簡易宿泊所は、大型プロジェクトの推進で日雇い労働者が流入することを見込み、86年ごろから近代的なシティホテル風のビルへの立て替えが進んでいる。中にはサウナ、衛星放送受信設備付きも出てきた。広さは3畳で、料金は千～2千円が多くなっている。」と変化を紹介しています。

あいりん地区は、これまで見てきたように、単身男性の多く住む町ですが、女性やこどもが皆無であったわけではありません。

	38 3	1963年	1964年	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年
	105	82	109	294	202	120	85	118	106	123	108
					1	5	13				
	73	187	122	91	56	25	44	26	21	18	28
					18	7	10	21	17	14	8
	8	6	0	8	5	5	6	3	11	5	3
					0						
					5	10	17	14		3	6
	3	12	14	53	36	67	57	64	2	18	4
					0				129	16	58
調査	5	23	6	24	16						
					5	62	59	84			
計	31	71	60	76	29						
	225	381	311	546	373	301	291	330	286	197	215
	38 3	1963年	1964年	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年
入	46	62	21	27	19	15	20	17	15	18	30
子	361	259	197	209	117	94	65	79	81	102	130
人	25				69	57	54	31	47		
	79	198	150	108	50	69	34	31	53	152	143
	179	72	16	16	67	61	65	49	63		
	97	200	160	141	22	9	10	4			
	27	88	59	46	135	97	90	75	98	82	65
	160	43	38	16	60	32	20	33	41	89	95
	4	12	52	48	20	16	17	11	35	18	26
	0	3	2	6	39	28	23	29	34	19	49
					3		3	8	3		
										63	62
計	123	147	62	88	67	85	99	101	143	67	66
	1,101	1,084	757	705	668	563	500	468	613	610	666
										566	666

年 別				計
37 12	38 3			
	38			
	39	78	26	43
	40			
	41			
	42	11	19	5
	43	8	16	4
	44	15	2	5
	45	12	11	7
	46	10	6	4

今池

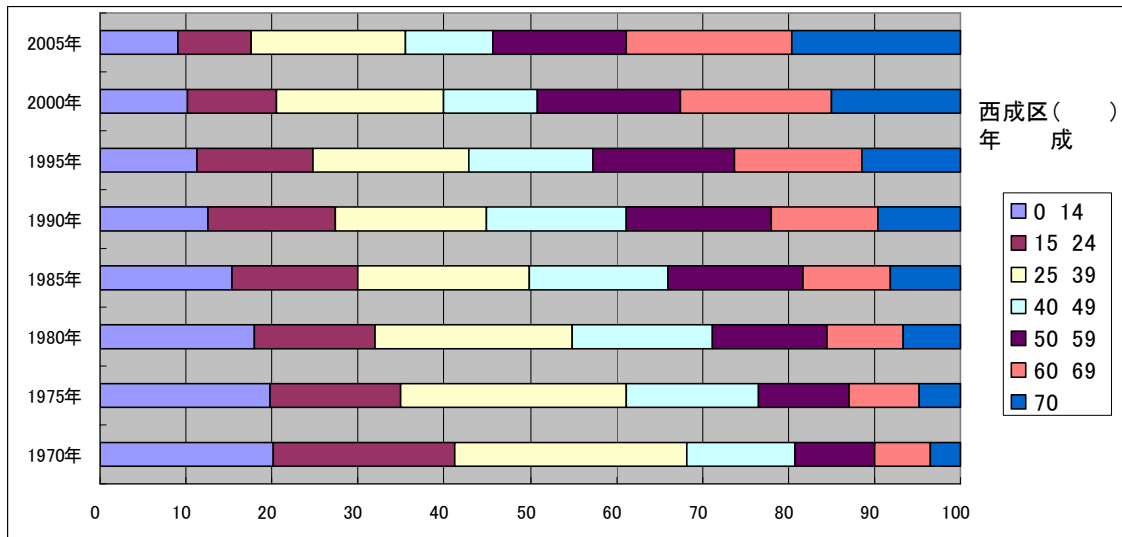
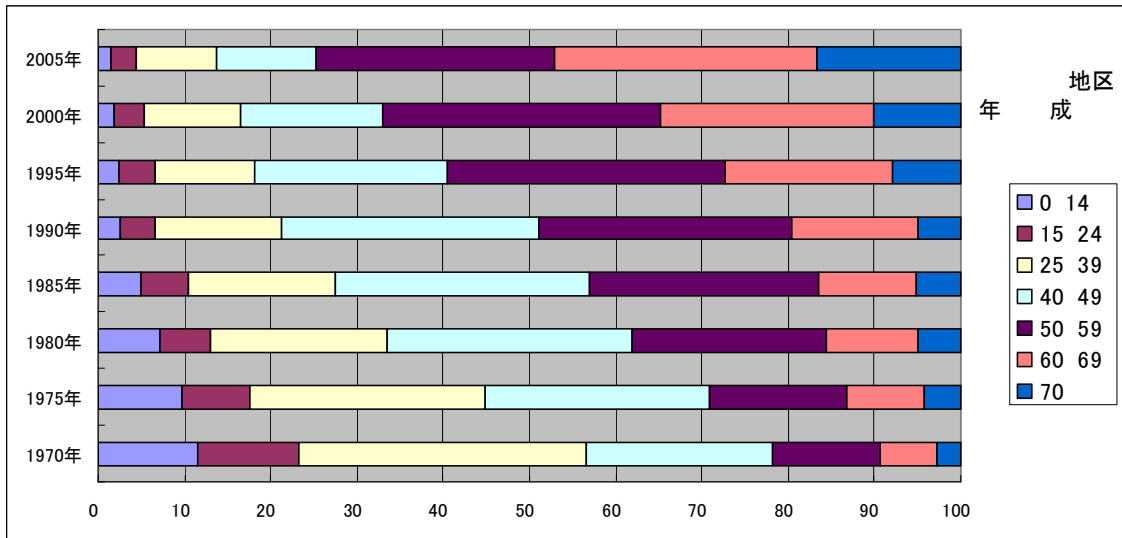
年 別				計
40	2			2
41	27			1
42	6	10		1
43	20	14		1
44	7	5		4
45	11	8		4
46	9	10		1

上の表は、大阪市立更生相談所の前身といえる大阪市立愛隣会館が受けた児童・婦人相談の件数を一覧にしたものです。

1963年から1972年にかけて、女性や児童を対象とした相談窓口があり、相談実績があったことが判ります。

「1962年2月には、地区内のドヤ住まい小人世帯を対象として1年6ヶ月の期限内で収容し、更生指導の上、公営住宅等の地区外の住宅への転出を図る目的で、大阪市立愛隣寮が開設され、続いて1965年6月、今度は愛隣寮の収容内容を一步すすめて、多子世帯を対象とした同種施設、大阪市立今宮生活館が開館し、本格的なスラム・クリアランスを目指す

までの暫定的実務がスタートした」「1969年12月末までに今池生活館は94世帯、愛隣寮は230世帯の累積退居世帯数を数えている。」と、前掲「退居世帯追跡調査」報告書に書かれているように、大阪市のスラム・クリアランスが、地区内に家族持ち世帯も住める環境を整えるのではなく、単身男性の街への純化であったことは明らかです。



平 年 (20 年 人 総 人)											
	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	90	75年	05	90年
西成区()	427	453	468	480	488	510	533	54	54	53	53
地区	449	476	487	499	521	540	569	50	50	71	71
萩之茶屋1	439	468	481	498	528	543	572	58	58	75	75
萩之茶屋2	439	471	484	494	518	556	584	56	56	90	90
萩之茶屋3	457	479	500	514	547	574	604	57	57	89	89
太子1	439	471	479	491	522	535	567	53	53	76	76
太子2	446	477	491	497	529	548	630	52	52	133	133
山王1	469	497	499	523	540	535	532	54	54	09	09
山王2	470	489	513	523	509	526	557	53	53	35	35
天下茶屋北1	469	490	504	510	512	525	547	41	41	37	37
花園北1	434	465	448	445	460	479	520	11	11	74	74

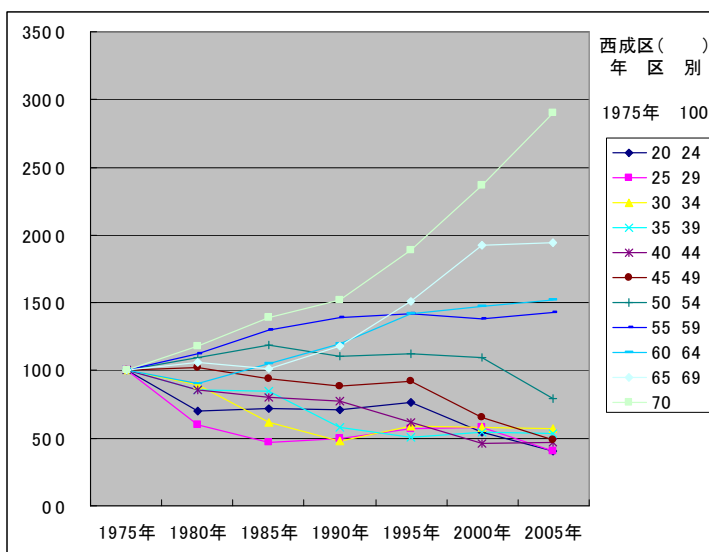
1979(54)年1 1 平 年 447
 1981(56)年1 1 平 年 461
 1995(平成7年)3 平 年 533

1970年の年齢構成を見ると、あいりん地区ではあいりん地区を除く西成区よりも25-49歳の占める割合が大きく、その代わり24歳以下の占める割合が小さくなっていることが判

ります。その後、共に 50 歳以上の占める割合が大きくなっている傾向は同じですが、あいりん地区の方が極端に大きくなっています。

20 歳以上を対象として平均年齢を計算すると、あいりん地区では 1990 年に 49.9 歳とほぼ 50 歳になっていますが、あいりん地区を除く西成区では 2000 年で 51.1 歳になっています。

あいりん地区を除く西成区の平均年齢の上昇は、1975 年から 1990 年の 15 年間で 5.4 歳、1990 年から 2005 年の 15 年間で 5.3 歳、30 年間で 10.7 歳上昇していますが、あいりん地区では 1990 年から 2005 年の 15 年間の平均年齢の上昇が 7.5 歳と大きく、30 年間では 12.1



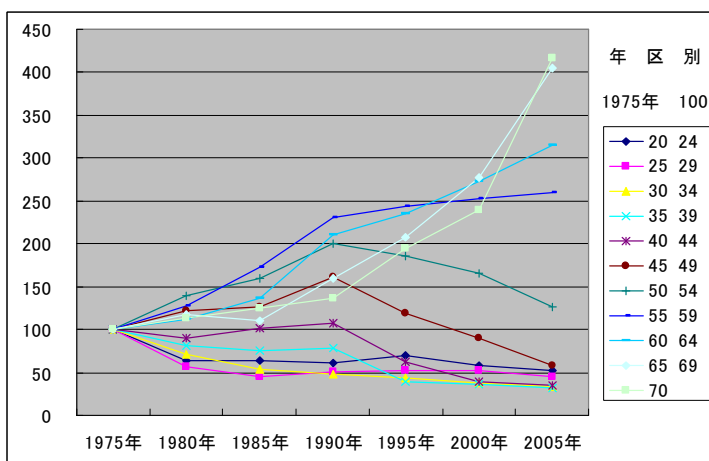
歳となっています。あいりん地区を除く西成区よりも上昇幅が大きく、90 年以降の高齢化が著しいことを示しています。

1975 年を 100 として年齢区分別に増減の推移を見ると、1990 年以降の 65 歳以上の増加が大きいことが見て取れます。

特に 2000 年から 2005 年にかけて 70 歳以上の増加が著しく、その間の 5 年に 65-69 歳の大きな流入があったことをうかがわせます。これはあいりん地区、あいりんを除く西成区の双方にいえることです

55-59 歳は、双方とも 1975 年を下回っていませんが、あいりん地区においては、1980 年から 1990 年にかけて、急増と言っている現象が見られます。

あいりん地区においては、35-39 歳から 50-54 歳の区分で、



1990 年を山とする共通の現象が見られます。

あいりんを除く西成区では、2005 年に 50-54 歳が 1975 年を下回るに至り、1975 年を上回っているのは 50-54 歳以上の年齢区分となっています。

あいりんを除く西成区では、1990 年以降 25-29 歳と 30-34 歳に若干の回復傾向をしますが、25-29 歳は 2005 年に再び下降しています。

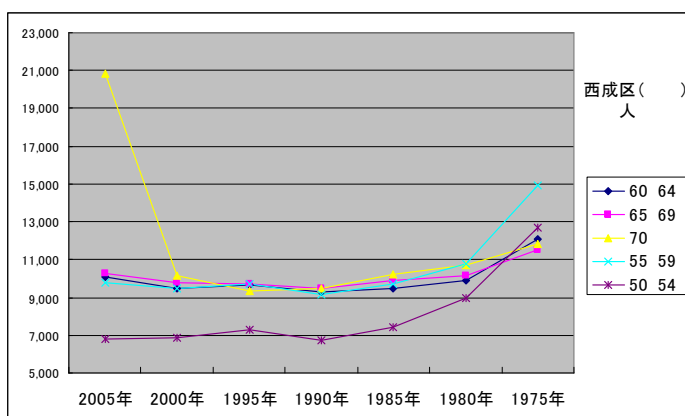
さて、人というものは 1 年に 1 歳だけ歳を加えることになっています。飛び級はありません

2005年	2000年	1995年	1990年	1985年	1980年	1975年
50 54	45 49	40 44	35 39	30 34	25 29	20 24
55 59	50 54	45 49	40 44	35 39	30 34	25 29
60 64	55 59	50 54	45 49	40 44	35 39	30 34
65 69	60 64	55 59	50 54	45 49	40 44	35 39
70	65 69	60 64	55 59	50 54	45 49	40 44

せん。ですから、2005年に50-54歳のグループにいた人は、その5年前の2000年には45-49歳のグループに含まれていたに違いありません。

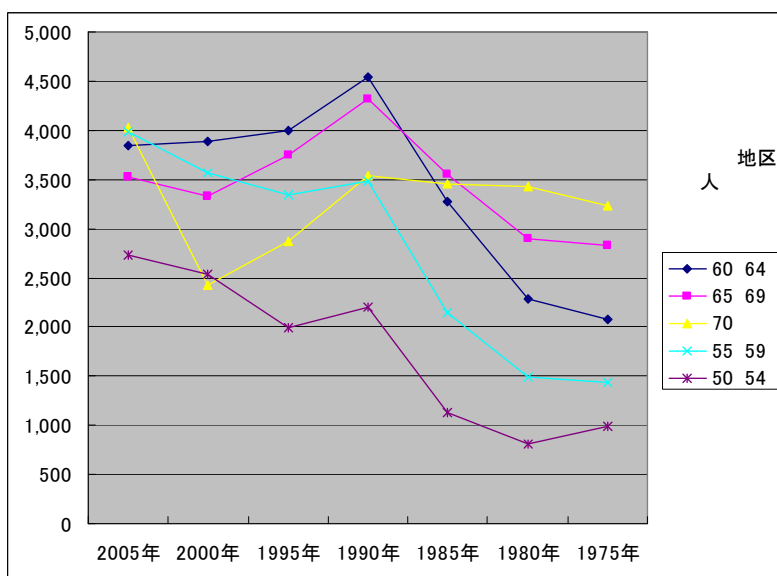
その5年前の1995年には、40-44歳のグループであったはずですが。

ある地域で、転入・転出が全くなければ、2000年の45-49歳のグループの人数と2005年の50-54歳のグループの人数は同じはずですが。年齢区分ごとに、国勢調査の数字を左上



表に従って並べ替えて作成したのが、「世代人員推移」と名付けたグラフです。年齢区分ごとに、転入・転出が、同じ数字で上の年齢区分に移行していれば、横一線のグラフになります。

あいりん地区を除く西成区を見ると、2005年に50-69歳であった人々は、30年前には20-39歳でした。その世代は、1975年から1980年にかけて西成区外に転出しています。とりわけ、2005年に50-54歳であるグループ（1975年には20-24歳）と55-59歳であるグループ（1975年には25-29歳）の落ち込みは大きなものがあります。1975年以降この世代が働ける場所が西成区には一貫してなかったことを示しているように思えます。2000年から2005年にかけての70歳以上の急増は、年齢に飛び級はないのですから（2000年65-69歳は10,132人）、2000年から2005



年の5年間に65歳以上人口の他地域から最小に見積もって9,000人近くの入りがあったようにみえますが、どうやらこれは、70歳以上が5歳刻みでなく小計数字になっていることから生じた見かけ上のことと考えられます。

1990年以降は、停滞的であったと言えます。

あいりん地区の様相はあいりん地区を除く西成区と

は大きく異なり、移動の激しさを示しています。

グラフから10歳刻みでグループ化できることが見て取れます。1990年の山以降の減少が少なく95年以降増加に転じている2005年50歳代のグループ(90年当時35-44歳)と、90年以降大きく減少し、90年水準まで回復しなかった60歳代のグループ(90年当時45-55歳)、そして、90年以降大きく減少し、2000年を底に急反転した70歳以上グループです。

70歳グループは、40-44歳(あるいはそれ以下-80歳以上も含まれるので)であいりん地区に登場し、1990年(55-59歳)まで、ほぼ停滞的に地区に留まり、その後、60-65歳の間、地区外に退出します(1,125人)。しかし、2005年には70歳以上として、地区に戻ってきます(1,608人)。2000年から2005年にかけて急増のように見えますが、この世代の地区内最大値から言えば、483人の増加にすぎないともいえます。

あいりん地区を除く西成区とあいりん地区の世代人員推移を比較すると、あいりん地区の人員に移動が激しいことがうかがわれます。

先に紹介した、あいりん地区人口の推移の表を改めて見ると、1975年から1985年にかけて地区人口は、23,217人→22,233人→23,083人と推移しており、そう大きな変動はなかったかのように見えますが、世代人員推移のグラフを見ると、世代により地区外に移動した

た下降やあらたに加わった上昇が見られ、変動が見られます。

総		9	10	10
	地			
1000	83	437	243	237

1980年国勢調査集計で移動状況をみると(左表)、出生を含め前回

	地				55年
菫之茶屋1	137	1,715	1,592	1,924	5,368
菫之茶屋2	104	1,292	886	880	3,162
菫之茶屋3	139	1,044	656	624	2,463
山王1	448	1,612	452	180	2,692
山王2	437	1,292	352	231	2,312
太子1	188	1,448	921	1,005	3,562
太子2	128	449	275	219	1,071
花園北1	100	426	186	164	876
天下茶屋北1	163	428	92	40	723
人計	1,844	9,706	5,412	5,267	22,229

更生調査(1975年)までにあいりん地区にすんでいた人は52%で。残り48%の半数は1年未満の居住者で占められています。

数字で確認すると、1年未満が5,267人であることが判ります。

(人員の合計が4人先に紹介した人員推移より少ないのですが、これは、国勢調査の集計結果表で

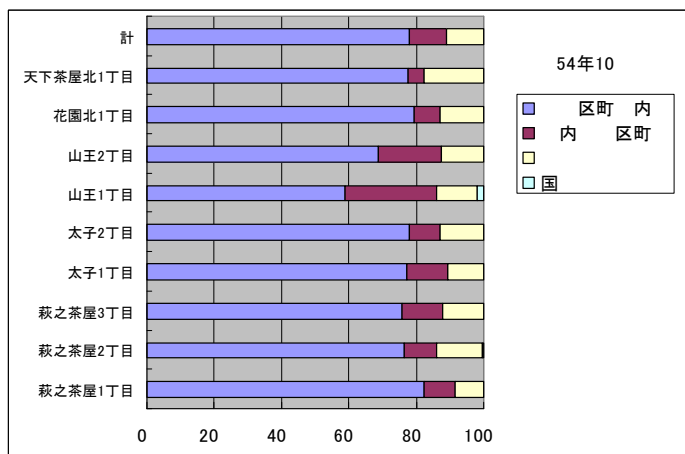
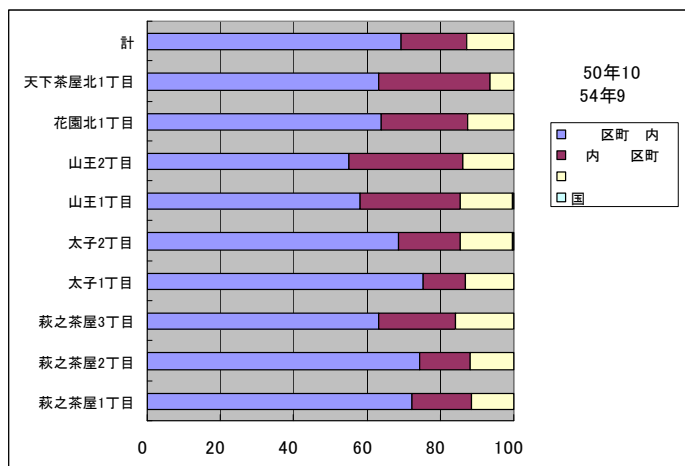
	地			50年
菫之茶屋1	137	1,715	2,868	4,720
菫之茶屋2	104	1,292	2,024	3,420
菫之茶屋3	139	1,044	1,389	2,572
山王1	448	1,612	1,129	3,189
山王2	437	1,292	1,089	2,818
太子1	188	1,448	1,772	3,408
太子2	128	449	572	1,149
花園北1	100	426	489	1,015
天下茶屋北1	163	428	335	926
人計	1,844	9,706	11,667	23,217

総数と内数が一致しない地区があるためです。総数では合っているが、内数だけで総数を出すと合わない。もはや訂正する手段がないと思われますので、4人誤差のまま使用します。)

1975年国勢調査の数字からすれば、11,667人が移動していることとなります。2回の国勢調査での移動量は、984人減

50年10	区町内	内区町		国
54年9				
萩之茶屋1丁目	1,149	256	183	0
萩之茶屋2丁目	660	121	105	0
萩之茶屋3丁目	414	138	103	0
太子1丁目	694	105	121	0
太子2丁目	189	46	39	1
山王1丁目	261	123	63	2
山王2丁目	194	109	49	0
花園北1丁目	118	44	23	0
天下茶屋北1丁目	58	28	6	0
計	3,737	970	692	3
	692	180	128	01

54年10	区町内	内区町		国
萩之茶屋1丁目	1,584	178	159	0
萩之茶屋2丁目	673	84	121	2
萩之茶屋3丁目	471	77	74	1
太子1丁目	777	120	108	0
太子2丁目	170	20	28	0
山王1丁目	106	49	22	3
山王2丁目	159	43	29	0
花園北1丁目	130	13	21	0
天下茶屋北1丁目	31	2	7	0
計	4,101	586	569	6
	779	111	108	01



少という単純比較では想像できないほどの大人数 22,346 人と確認されます。

これを地域内外の移動関係であるとすれば、地区外移動 11,667 人、地区内への新規移動 10,679 人、その差が 988 人であるともいえます（4 人の差は前述）。地区人口の半数が 5 年間で入れ替わっていることになります。

実際はどのようなのでしょうか。

昭和 50 年 10 月から 54 年 9 月までに、あいりん地区の現在居住地に移った人の異動元を見ると、大阪府外からの移動は少なく、大阪市内での移動が多いことが判ります。

昭和 50 年 10 月以降の異動元では、

さらに大阪市内での移動が多いことが判ります。

町別に見れば、山王で大阪府外からの移動が多く、萩之茶屋 1 丁目、太子 1 丁目等簡宿の多いところでやや大阪市内での移動が多いように読み取れます。

このことから、移動はあいりん地区内、簡宿から簡宿への移動を意味しており、地区外との流出入を意味するものではなく、見かけの移動量ほど住民の入れ替わりはないとも考えることができます。

しかし、他の要素を考え合わせる

	男	女	計
50年	16,261	6,956	23,217
	384	1,402	1,786
	802	0	802
	418	1,402	984
55年	16,679	5,554	22,233
	45	45	計
50年	13,654	9,563	23,217
	3,336	195	3,531
	42	2,505	2,547
	3,294	2,310	984
55年	10,360	11,873	22,233

とどうでしょうか。

男女で言えば、女性は、地区外への移動だけですが、男性は地区内外の移動があり、それらの増減を差し引きして、全体としては 984 人の増となっています。移動量は、2,588 人と計算されます。居住開始時期から算出した移動量 (22,346 人) よりはるかに小さい数字であり、移動の多くが地区内移動であったことを裏付けるように思えます (前ページ末尾表参照)。

年齢を 45 歳以上未満で比較すると、移動量は 6,078 人と計算されます。これも、居住開始時期から算出した移動量と比べて極めて小さいといえます。40-44 歳から 45-49 歳への年齢区分間移動を考慮に入れると、もっと移動量は小さくなることも考えられます。

「移動はあいりん地区内、簡宿から簡宿への移動を意味しており、地区外との流入出を意味するものではなく、見かけの移動量ほど住民の入れ替わりはない」という説は、支持されるように思われます。

だがしかし、念には念を入れて検討してみることにしましょう。

年 区		50年	55年	
0 14			1,592	
0 14	15 19	2,249	665	8
15 19	20 24	839	633	206
20 24	25 29	984	808	176
25 29	30 34	1,438	1,488	50
30 34	35 39	2,082	2,281	199
35 39	40 44	2,828	2,893	65
40 44	45 49	3,234	3,420	186
45 49	50 54	2,809	3,013	204
50 54	55 59	2,156	1,963	193
55 59	60 64	1,539	1,357	182
60 64	65 69	1,221	1,026	195
65 69	70	871	1,094	744
70		967		
計		23,217	22,233	984

各年齢区分において、移動が全くないとすれば、50 年 0-14 歳 2,249 人は、55 年の 0-14 歳+15-19 歳と同じになるはずですが、55 年の方が 8 人多く、この年齢区分において、他地区からの移動があったか、新生児があったことを示していることができます。

50 年 15-19 歳(839 人)は、55 年 20-24 歳ですが、206 人他地区へ移動して 633 人となっています。

以下同じように計算すると、年齢区分を上昇することなく他地区へ転出したもの 1,696 人、途中で転入してきたもの 712 人となります。

	内		合計
	(年 区 区)	年 区	
0 14	657	657	657
15 19	174	8	182
20 24	351	206	145
25 29	630	176	454
30 34	594	50	644
35 39	547	199	746
40 44	341	65	406
45 49	611	186	425
50 54	857	204	653
55 59	424	193	617
60 64	136	182	318
65 69	155	195	350
70	127	744	871
計	984	984	0
		1,696	3,234
入		712	3,234
		984	0
		2,408	6,468

す。

年 区		50年	55年	
0 14		2,249	1,592	657
15 19		839	665	174
20 24		984	633	351
25 29		1,438	808	630
30 34		2,082	1,488	594
35 39		2,828	2,281	547
40 44		3,234	2,893	341
45 49		2,809	3,420	611
50 54		2,156	3,013	857
55 59		1,539	1,963	424
60 64		1,221	1,357	136
65 69		871	1,026	155
70		967	1,094	127
計		23,217	22,233	984

一方、50 年と 55 年を同年齢区分で比較すると、単純加齢移動の表とは様相の異なった結果が見られます。この増減のなかには、単純加齢移動の差分が含まれているので、移動量が隠されていることとなります。

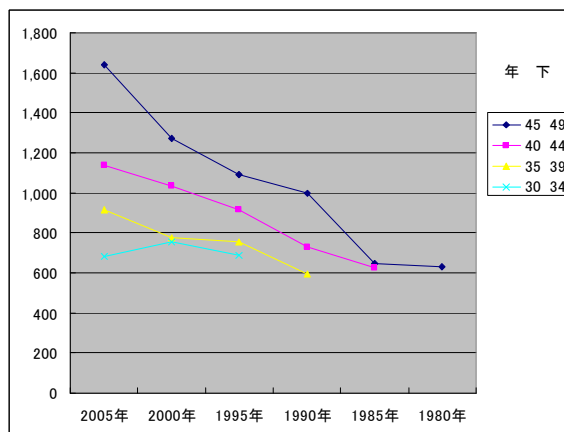
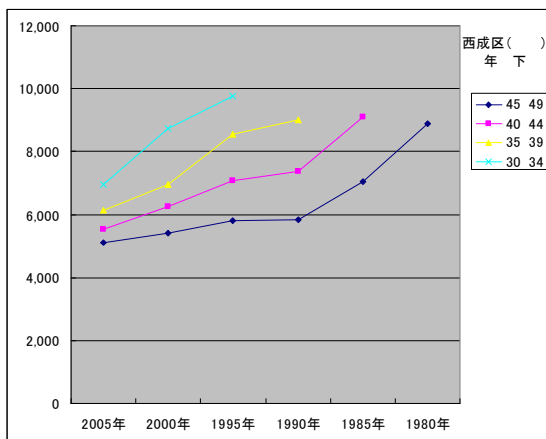
そこで、差分を反映する表を作成します。

50年と55年の20-24歳を比較すると、351人減となっています。年齢区分単純持ち上がりでの計算では、206人の減でしたから、それ以上の減少があったことになります。351-206=145人が、20-24歳区分における国勢調査間での地区外移動と見なすことができるでしょう。移動量の合計は、351人です。

以下同じような計算をすると、移動量の総計は8,876人となります。これは、地区外への移動、地区外からの移動の合計です。居住開始時期から算出した移動量(22,346人)の約4割に当たります。6割は地域内移動であったと推察されます。

ちなみに50年で算出された移動(11,617人)の内、地域外移動は42.2%、残り約57.8%が地域内移動となります。55年で算出された増加(10,679人)の内、地域外からの移動は37%、残り63%が地域内の移動となります。(これは最小限の移動見込みと言えます。期間内の同数の出入りは計算・推測ができないからです。)

あいりん地区では、人口停滞期においても人の出入りは多いと言うことができますが、単純に総量だけで計算されるよりも、また、一般に考えられているよりは少ないのではなかろうかと思えます。地元生まれと50年9月以前からの長期居住が52%、中短期居住(50年10月~55年9月から居住)が38%、その38%の内の4割近くが地域外から増えたにすぎないのですから(55年人員22,229人の17.8%です)。



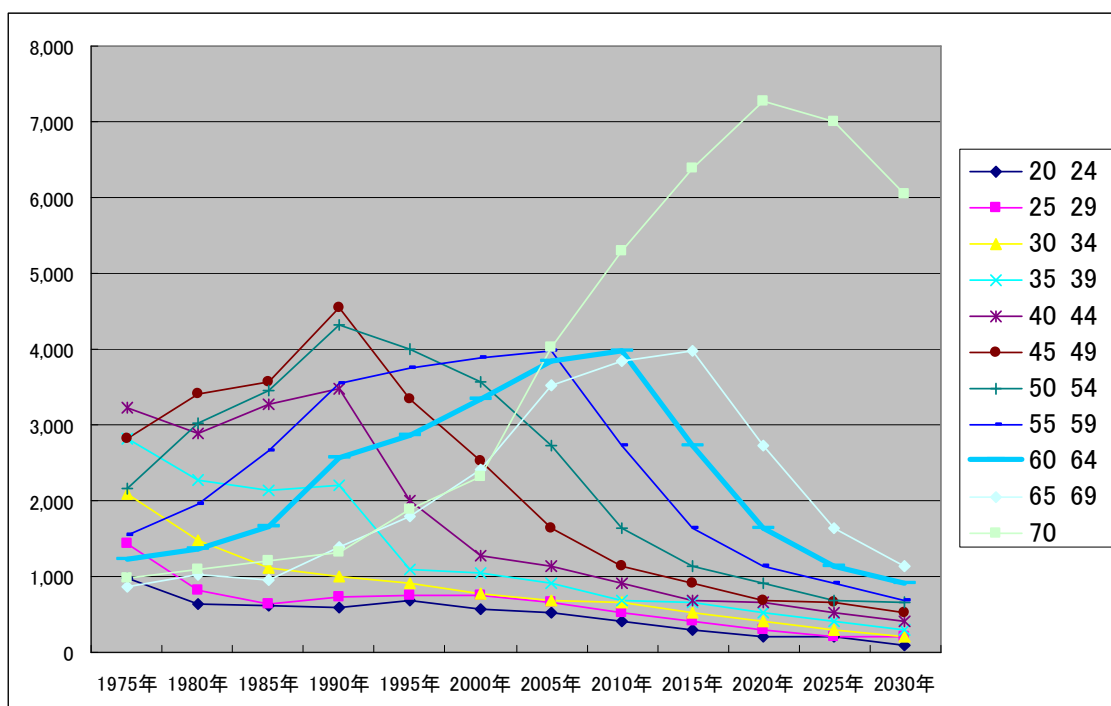
2005年	2000年	1995年	1990年	1985年	1980年
45 49	40 44	35 39	30 34	25 29	20 24
40 44	35 39	30 34	25 29	20 24	
35 39	30 34	25 29	20 24		
30 34	25 29	20 24			

先に、50歳以上について、世代人員推移のグラフを示しましたが、それ以下の世代についてもグラフを示して見ることにします。2005年に

45-49歳であった人は、1980年には20-24歳でした。その年齢区分の人は、あいりん地区には633人しかいませんでした。しかし、その年齢区分の世代は、加齢と共にあいりん地区への移動が目立ちます。

あいりんを除く西成区は、20-24歳から年齢を加えるに従って、西成区外あるいはあいりん地区へと移動していることを示しています。

	20 24	25 29	30 34	35 39	40 44	45 49	50 54	55 59	60 64	65 69	70	合計
1975年	984	1,438	2,082	2,828	3,234	2,809	2,156	1,539	1,221	871	967	20,129
1980年	633	808	1,488	2,281	2,893	3,420	3,013	1,963	1,357	1,026	1,094	19,976
1985年	624	647	1,123	2,145	3,270	3,557	3,451	2,665	1,659	955	1,201	21,297
1990年	596	729	996	2,207	3,487	4,544	4,316	3,542	2,563	1,392	1,322	25,694
1995年	687	753	913	1,090	1,998	3,342	3,991	3,749	2,863	1,805	1,876	23,067
2000年	571	756	776	1,035	1,272	2,533	3,562	3,881	3,335	2,417	2,310	22,448
2005年	518	656	681	914	1,137	1,638	2,733	3,988	3,842	3,527	4,025	23,659
2010年	400	518	656	681	914	1,137	1,638	2,733	3,988	3,842	5,286	22,171
2015年	300	400	518	656	681	914	1,137	1,638	2,733	3,988	6,390	20,095
2020年	200	300	400	518	656	681	914	1,137	1,638	2,733	7,265	17,515
2025年	200	200	300	400	518	656	681	914	1,137	1,638	6,998	14,947
2030年	100	200	200	300	400	518	656	681	914	1,137	6,045	12,562



2005年までは国勢調査の数字ですが、2010年からは、移動が全くなく、加齢によって年齢区分があがるだけという想定で、グラフを作成してみました。

70歳以上については、死亡率30%で減算しています。(死亡率30%は、日本福祉大学などの研究グループの研究成果による。もっとも所得の低い第一段階—生活保護受給レベルの男性の死亡率は34.6%とある。2008年11月8日朝日新聞夕刊・大阪)

人口総数は2005年以降下がり続け、20年後には1万人近く減少します。70歳以上人口のピークは2020年と日本全体が2030年とされているより10年早く訪れます。それ以下

	20 24	25 29	30 34	35 39	40 44	45 49	50 54	55 59	60 64	65 69	70		
1975年	49	71	103	140	161	140	107	76	61	43	48	1000	20,129
1985年	29	30	53	101	154	167	162	125	78	45	56	1000	21,297
1990年	23	28	39	86	136	177	168	138	100	54	51	1000	25,694
1995年	30	33	40	47	87	145	173	163	124	78	81	1000	23,067
2005年	22	28	29	39	48	69	116	169	162	149	170	1000	23,659
2015年	15	20	26	33	34	45	57	82	136	198	318	1000	20,095
2025年	13	13	20	27	35	44	46	61	76	110	468	1000	14,947
2030年	08	16	16	24	32	41	52	54	73	91	481	1000	12,562

の年齢はそれ以前に減少に転じます。

1980年 55年 国勢調査	総				男				女			
	総	年	旧	年	総	年	旧	年	総	年	旧	年
萩之茶屋1丁目	1000	770	206	23	1000	783	196	20	1000	658	290	50
萩之茶屋2丁目	1000	722	253	24	1000	729	248	22	1000	674	290	36
萩之茶屋3丁目	1000	697	266	37	1000	722	248	30	1000	589	342	69
太子1丁目	1000	696	271	30	1000	709	263	28	1000	628	321	45
太子2丁目	1000	708	233	56	1000	745	197	55	1000	606	335	60
山王1丁目	1000	597	337	64	1000	600	320	80	1000	595	357	46
山王2丁目	1000	605	325	70	1000	614	308	77	1000	592	345	60
花園北1丁目	1000	593	318	89	1000	633	282	84	1000	504	396	100
天下茶屋北1丁目	1000	540	383	76	1000	492	402	107	1000	577	369	51
	1000	692	267	40	1000	716	246	36	1000	606	337	54
山王3丁目	1000	494	398	107	1000	475	400	137	1000	509	397	83
花園北2丁目	1000	507	397	92	1000	538	357	97	1000	466	448	86
花園 1丁目	1000	474	430	95	1000	469	402	124	1000	478	456	67
花園 2丁目	1000	344	534	121	1000	351	478	172	1000	339	583	77
天下茶屋北2丁目	1000	621	310	64	1000	627	293	74	1000	615	329	51
天下茶屋東1丁目	1000	551	385	60	1000	510	406	82	1000	588	367	39
天下茶屋東2丁目	1000	567	378	54	1000	539	394	67	1000	594	361	42
天下茶屋1丁目	1000	579	352	69	1000	618	304	77	1000	525	416	59
天下茶屋2丁目	1000	423	469	105	1000	403	454	139	1000	441	482	74
天下茶屋3丁目	1000	385	502	113	1000	361	482	157	1000	405	519	75
	1000	506	408	83	1000	509	386	103	1000	503	432	63

1980年国勢調査の学歴の項を、あいりん地区とその周辺の地区で比較したものが、上記表ですが、あいりん地区男性がもっとも低学歴であることが判ります。

20歳以上で算出した平均年齢は、あいりん地区が47.6歳でした。あいりん地区を除く西成区は45.3歳で、2.3歳開きがあります。

1980年で47.6歳であるとする、生まれたのは1933年、現在年齢は75歳ということになります。中学卒業は32年前の1948年となります。国民学校を1946年3月までに卒業する者は旧制で進学し、1947年3月以降に卒業した者から全員新制中学校に進学したということですから、この世代の人は旧制の国民学校初等科（6年）か、高等科（2年）を卒業し、新制中学の3年生に進学して、中学校卒業となったと思われます。実際には、旧制のまま学歴を終えた人が多かった世代と考えられます。

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	計	%
旧小中退			1	1			2	
新中中退		1	4				5	
小計		1	5	1			7	7.1
旧小卒			1	2			3	
新中卒		1	11	23	1		36	
小計		1	11	24	3		39	39.8
高小卒			2	7			9	
高小中退							0	
小計			2	7			9	9.2
旧中中退				2			2	
旧中卒				1		1	2	
実学中退				1	1		2	
実学卒				2			2	
新高中退			3				3	
新高卒	1	6	8	1			16	
小計	1	6	11	7	1		26	26.5
旧高専卒				1			1	
旧高卒				1			1	
大学中退		2	2				4	
大学卒			2				2	
小計		2	4	2			8	8.2
その他	1		3				4	
不明			2		2		4	
計	3	20	51	20	3	1	98	

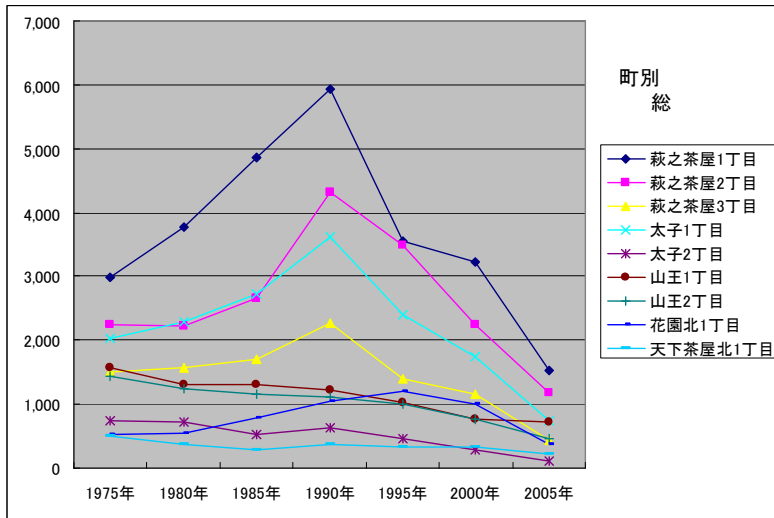
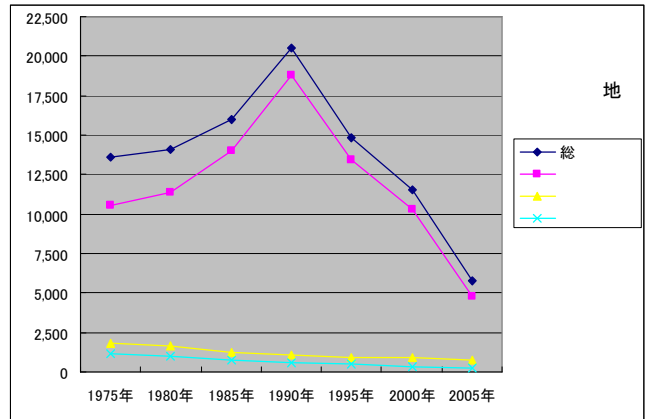
卒業し、新制中学の3年生に進学して、中学校卒業となったと思われます。実際には、旧制のまま学歴を終えた人が多かった世代と考えられます。

1983年9月に、釜ヶ崎差別と闘う連絡会がセンター周辺で聞き取り調査をしましたが、その時の平均年齢は44.8歳、80年国勢調査よりも2.8歳若く、義務教育終了あるいは未終了者が56.1%でした。ただし、高校等の中退者を卒業歴で義務教育までとすれば、63.3%となります。

その計算でも、80年国調あいりん地区男性よりも義務教育修了者の割合が低くなっていますが、あいりん地区周辺より

は高い数字となっています。

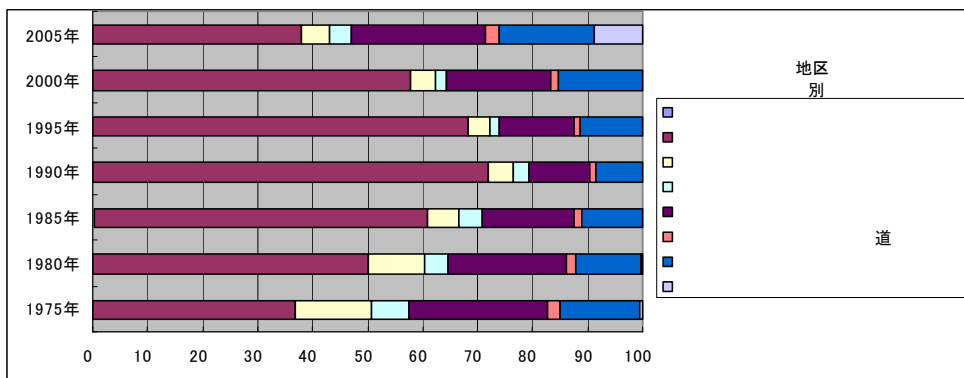
地 別				
	総			
1975年	13,562	10,574	1,838	1,140
1980年	14,070	11,410	1,652	1,003
1985年	16,026	14,046	1,261	718
1990年	20,486	18,802	1,094	590
1995年	14,852	13,442	919	491
2000年	11,532	10,286	926	322
2005年	5,741	4,753	769	216
1975年	100.0	78.0	13.6	8.4
1980年	100.0	81.1	11.7	7.1
1985年	100.0	87.6	7.9	4.5
1990年	100.0	91.8	5.3	2.9
1995年	100.0	90.5	6.2	3.3
2000年	100.0	89.2	8.0	2.8
2005年	100.0	82.8	13.4	3.8



あいりん地区は、日本最大の日雇い労働者の街といわれています。

産業従業上の地位では、日雇い・臨時の項目が2005年集計までありませんでしたので、臨時・日雇いの割合を把握することはできませんが、人に使われて働く雇用者の割合が高く（最大時は90年の91.8%）、その多くは日雇いで働いていた

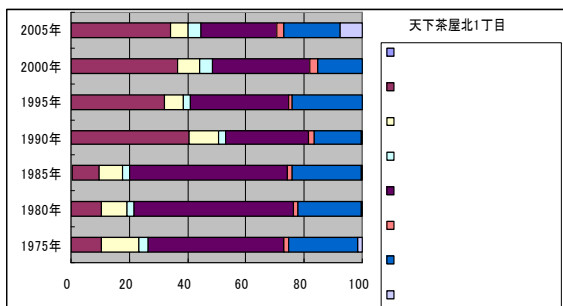
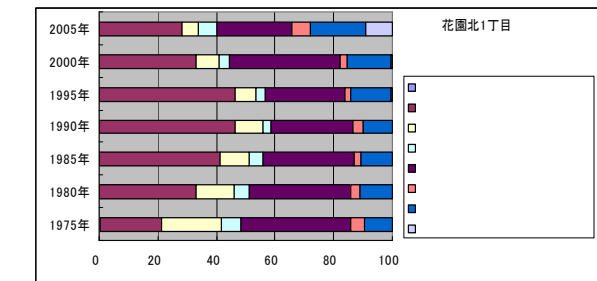
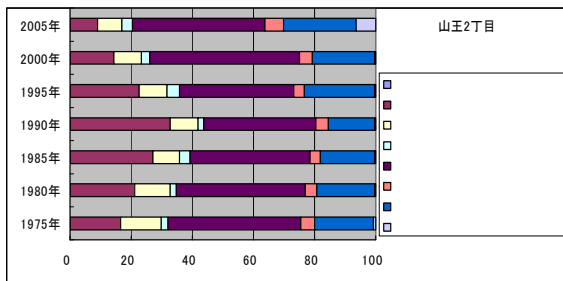
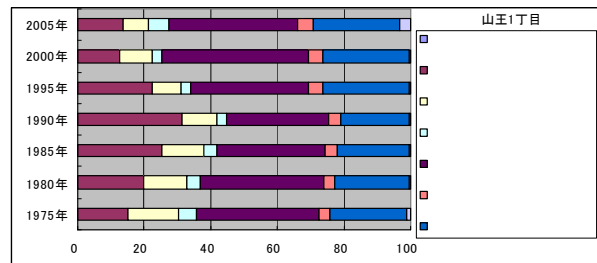
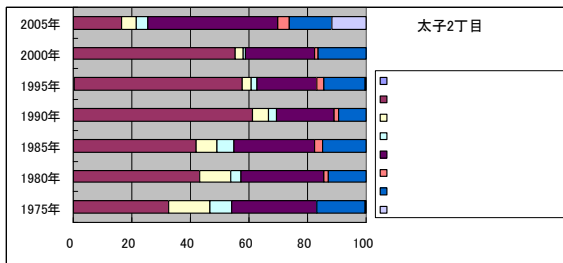
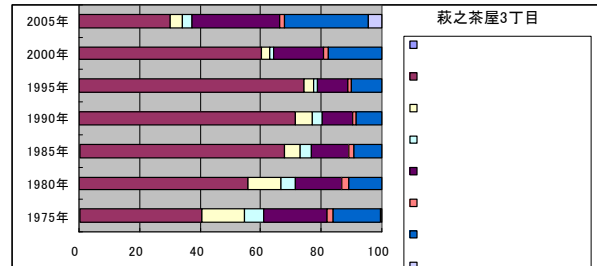
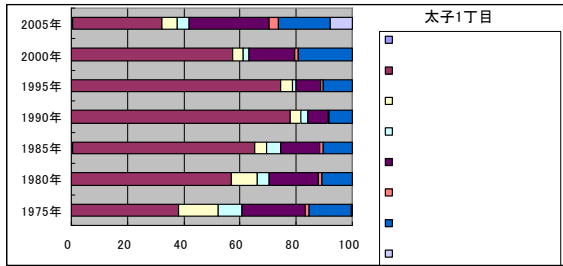
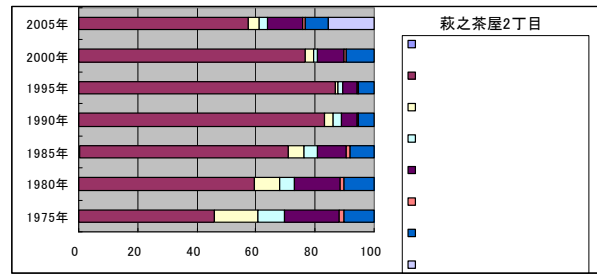
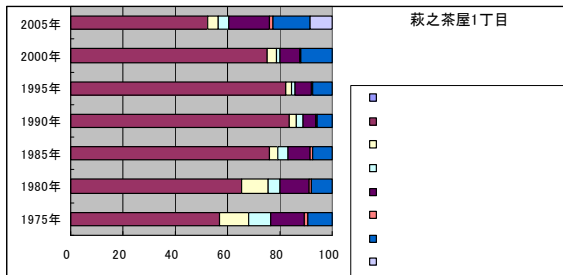
と考えることができます。産業従事者（働いている人）の人員が、大きく減少していることが判ります。



あいりん地区の日雇い労働者の多くは、建設・土木産業で働いているといわれ

ています。1975年では36.7%、1990年71.6%、2005年37.8%、建設産業に従事する人の地域への集中度は高いといえるでしょう。しかし、近年、占める割合は下がっています。

2005年公務には、便宜上、「その他の産業に分類されないもの」を足しています。



あいりん地区全体では、建設業に従事する人の割合に増減がありました。地区内各町でも、変動があります。しかし、町により特徴があり、地区全体の傾向とは違う傾向を示している町もあります。

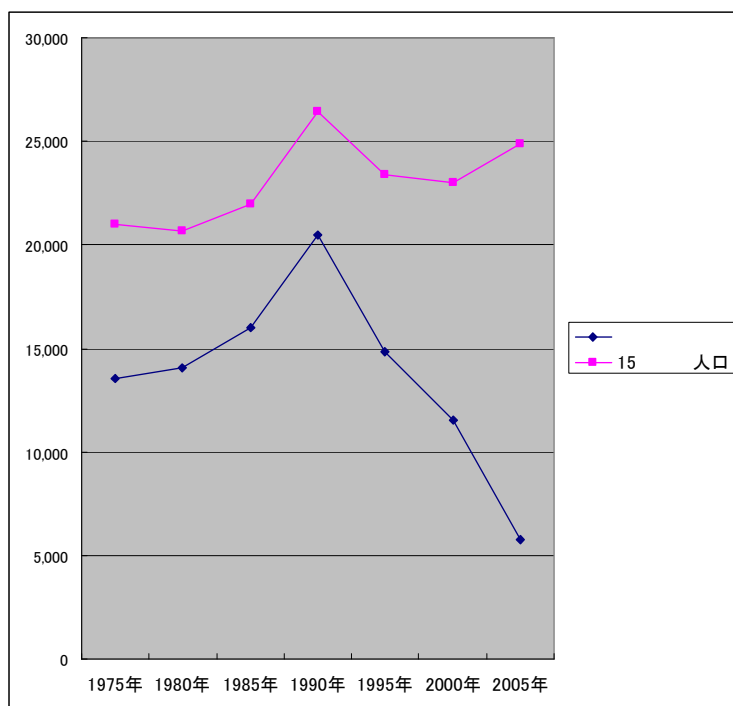
たとえば、花園北1丁目や天下茶屋北1丁目、萩之茶屋2丁目などは、1990年を最高

とすることは変わらないものの、1975年の割合より多くなっています。

製造運輸の割合は1975年最大に減少を続けていますが、山王2丁目は一定割合を維持しているといえます。

建設業の割合の低下を埋めるものとして割合を増やしているのは、卸・小売・飲食店ですが、全体の従事者総数が大きく減少していることは確認済みですから、これを持って街

の様相が労働者の街から飲食小売の街に変わったといえないことは言うまでもありません。



15歳以上の地区人口と産業従事者総数の推移をグラフで見ると、違和感を覚えます。

1975年から1980年にかけては、15歳以上の若干の減少、働いている人の若干の増加です。

これは、人員が減っても、それまで働いていなかった人が働き始めたと考えることができ、違和感はありません。

1990年までは、15歳以上地区人口も働いている人も増えているのですから、働く人の地区への新規移動と理解できます。

1990年から1995年にかけては、従事者の減少より地区人口の減少割合が少ないのが気になります。しかし、これは多分、あいりん地区外でも経済の不況期には見られる現象だと考えることができます。

そう考えても理解しにくいのが、1995年以降の従事者の減少と15歳人口の停滞・増加という推移です。

人が生活するには、働いて収入を得なければなりません。勿論、働く以外にも社会保障制度＝生活保護を活用することで生活に必要な最低限度の収入を得ることができます。

下表は、従事者（国勢調査数字）に、生活保護受給者の推定値と家事・通学している人（1980～90年は国勢調査。他は推定値）を加えたものです。

生活保護受給者の推定値は、西成区福祉事務所発行「昭和61年度生活保護運営方針並び

	15歳以上人口	従事者	生活保護受給者	家事・通学している人	合計
1975年	20,968	13,562	1,021	3,500	2,885
1980年	20,641	14,070	940	3,443	2,188
1985年	21,947	16,026	961	3,317	1,643
1990年	26,413	20,486	900	3,127	1,900
1995年	23,409	14,852	1,000	2,900	4,657
2000年	22,982	11,532	2,500	2,700	6,250
2005年	24,900	5,741	6,500	2,500	10,159
1975年	100.0	64.7	4.9	16.7	13.8
1980年	100.0	68.2	4.6	16.7	10.6
1985年	100.0	73.0	4.4	15.1	7.5
1990年	100.0	77.6	3.4	11.8	7.2
1995年	100.0	63.4	4.3	12.4	19.9
2000年	100.0	50.2	10.9	11.7	27.2
2005年	100.0	23.1	26.1	10.0	40.8

に年間事業計画」に記載されている

「地区別非保護世帯の推移」の内あい

りん地区小計(1977年1,021人、

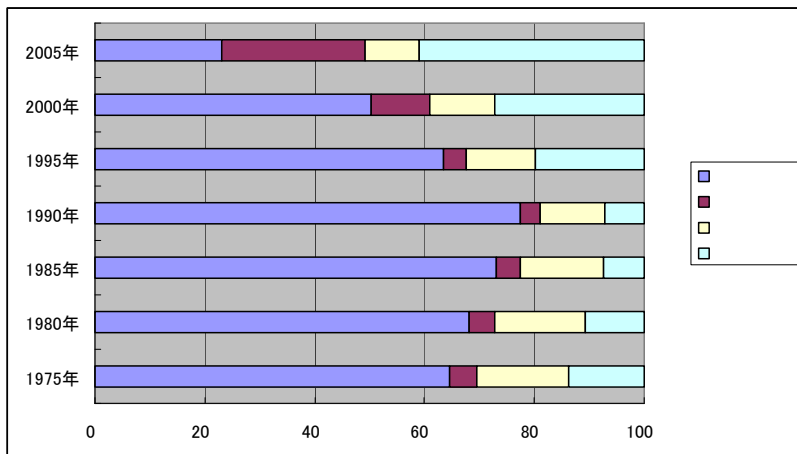
1980年940人、1985年961人)

と西成区支援運営課数字(2002年

2,500人、2004年5,669人、2008

年6,931人)を参考にしています。

2005年には、2000年より従事者が5,791人減少していますが、生活



保護は推定で 4,000 人増えており、仕事を失った人が他地区へ移動したのではなく、生活保護受給者として同地区に留まっていることを示すものと考えられます。

増加したのが「その他」の人々であること

は明らかです。年齢での検討で明らかだったのは、近年の人口増が 65 歳以上を中心とするものでした。

2005 年、世帯分類では一般世帯が 14,061 人、その他世帯が 11,180 人でした。

2005 年で、活保護と家事・通学の合計は推定 9,000 人。15 歳未満人口は、341 人でした。その合計(9,341 人)と一般世帯人員との差、4,720 人は、一般世帯に所属する従事者であると考えられます。

従事者 (5,741 人) の中で、その他世帯に訴属するのは、5,741 人 - 4,720 人 = 1,021 人と計算されます。その他世帯 11,180 人から 1,021 人を引くと、10,159 人。この数字は、15 歳以上人口から従事・生活保護等を引いた「その他」の人数と合っています。

このことから、「その他」の人々は、世帯分類ではその他世帯に含まれていると考えることができます。

では、その他世帯に属する 10,159 人はどのような人なのでしょうか。

あいりん地区の中には、生活保護施設が 2 箇所あります。大阪自彊館愛隣寮 (定員 100 名)、大阪自彊館三徳寮 (定員 150 名) です。

法外援護の生活ケアセンター (定員 224 名) とあいりん臨時緊急夜間避難所 (定員 1,040 人 = 実人員 800 で計算) もあります。

地区内の三公園やセンター周辺、山王商店街・高速高架下などで野宿をする人々もいます。それらの合計を 2,500 人とすると、7,659 人が簡易宿泊所で生活していると推定せざるをえません。

		1976(51)年9 15			
年	国	男	女	計	218
	内	年	48	7	
		年	47	6	53
		年	1	1	2
	年	8	0	8	32
	()	13	2	15	60
					00
	計	69	9	78	310
	調査	221	31	252	1000

簡易宿泊所で生活している 7,659 人について、推測できる資料があります。

少し古いのですが、簡宿組合加入の簡宿に泊まっている 65 歳以上を対象とした、簡宿高齢者調査の結果です。

1976 年で、3 分の一が年金受給者であることが示されています。

		1983(58)年8 26						
		65	69	70	74	75	計	
年 入		54		22		8	84	33.7
	国	6		12		8	26	10.4
	年	6		7		3	16	6.4
		5		11		7	23	9.2
		1		5		5	11	4.4
	計	45		33		11	89	35.7
		117		90		42	249	100.0

1983年と1985年では、受給状況と聞くのが露骨であると考えられたためか、加入状況となっています。

		1985(60)年10 1						
		65	69	70	74	75	計	
年 入		49		27		6	82	32.5
	国	8		6		16	30	11.9
	年	5		8		7	20	7.9
		4		5		1	10	4.0
							0	0.0
	計	62		36		12	110	43.7
		128		82		42	252	100.0

1985年の加入状況は、若干落ち込んでいますが、それでも23.8%あり、少なくとも私の想像（多分一般的な予想）を上回る数字となっています。

再度確認すると、年齢での検討で明らかだったのは、近年の人口増が65歳以上を中心とするものでした。簡宿高齢者調査と合わせて考えれば、年齢受給者を中心としての増加であったと考えられないこともありません。

	15 人口			年			
2005年	24,900	5,741	6,500	7,659	2,500	1,700	800
	100 0	23 1	26 1	30 8	10 0	6 8	3 2

2005年国勢調査は簡易調査で、収入についての項目はありませんでした。2000年は大規模調査で、「家計収入の種類」がありました。2010年は大規模調査の年なので、収入について把握できる可能性があります。

従って、現在は過程を検証する方法を考えつきません。仮定はどの程度正しいのか不明のままです。

2005年のあいりん人口の内、65歳以上は7,552人、上記表「仮定」の「年金・仕送り」に近い数字ですが、「生活保護」の相当部分が65歳以上（約7割—2008年）と考えられますから、65歳以上7,552人の内5,300人は生活保護と考えられます。

そうすると7,659人の内5,300人は65歳以下と考えられ、年金の可能性のあるのは約2,300人となります。

2005年で65歳以上は、1940（昭和15）年生まれです。

2005年あいりん人口で、60-64歳は3,842人でしたが、これらの人々は1945（昭和20）年以前の生まれになります。年金受給と全く関係のない年齢とは言い切れません。

(男 60 年 年 年 年 年)							(男 60 年 年 年 年 年)						
年	60	61	62	63	64	65	年	60	61	62	63	64	65
15年4 2							15年4 2						
16年4 1							16年4 1						
16年4 2							16年4 2						
18年4 1							18年4 1						
18年4 2							18年4 2						
20年4 1							20年4 1						
20年4 2							20年4 2						
22年4 1							22年4 1						
22年4 2							22年4 2						
24年4 1							24年4 1						

7,659人の内、60歳未満は多くて3,000~3,800人と計算されます。

この人たちが、簡宿住まいで、収入源を推定できない層として残ります。

もう少し推定を重ねてみます。

65		5,300
	7,552	1,000
		1,252

65 歳以上の人は、生活保護の他、野宿・施設・一般世帯の年金受給者が考えられます。それらを推定値で入れると、簡宿住まいの 65 歳以上の推定値は、1,252 人となります。

60-64歳		800
	3,842	900
		2,142

60-64 歳人口も同じように、生活保護の他、野宿・施設・一般世帯の年金受給者が考えられます。それらを推定値で

入れると、簡宿住まいの 60-64 歳の推定値は、2,142 人となります。

7,659	65	1,252	年
	60-64歳	2,142	
	60	4,265	

先の「仮定」表の内「年金・仕送り」の項の人員 7,659 人から 60 歳以上人員を引くと、4,265 人が残ります。

これらの人々は、国勢調査上、産業に従事しておらず、年金受給している可能性のない人々と考えられます（もと船員・炭坑労働者は 55 歳から年金受給できますが）。

簡宿住まいで、時々センターから就労するものの、建設産業で働いているという「日雇い専門意識」を持たない層が、該当項目を未記入で提出した結果と考えられないでもありません。

「あいりんには、これまでもそんな人がたくさん居た」としても、国勢調査のここ 2 回の結果で、目立つようになったのは確かで、これまでになく傾向です。

なんらかの説明が求められていると考えますが、今のところ説明に使える情報を持ち合わせていません。

簡宿写真・図利用元紹介

*泰平の谷間の生と死 小杉邦夫 1978 年 9 月 プレイガイドジャーナル社

*あいりん地区簡易宿所調査 1969 年 3 月 関西都市社会学研究会